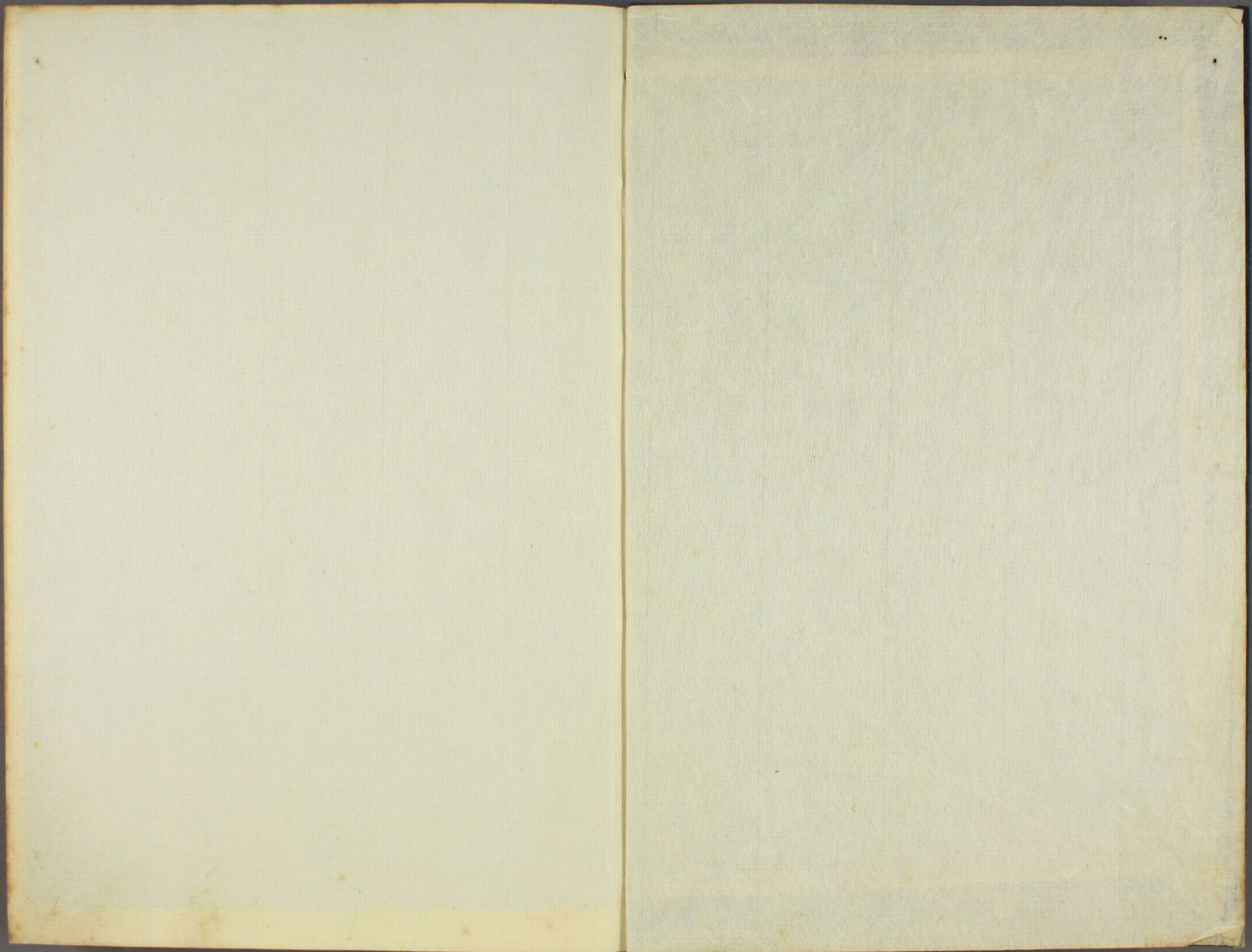




芭蕉附合集  
一

中村俊定文庫  
文庫 18  
1008







芭蕉翁俳諧の連句  
集へらくくのあはれ  
と——かす



一しをば翁俳諧の巻くはまを世は  
その中にし七部集とていらくそをわ  
とふふかんあまをたけ延慶より  
まその向うういり色をらしとくか  
出魚れあし朽果んそあまをく  
拾ひ集——加賀のみなり一旬法抄ゆ

しつらきし流く流き、持りてしを  
物し事世ふかしくしとさうし來て  
送るゆりし多く情りうし句法師の多く  
をををうて今の形見として強うを

一編次の大自色曆の序と考へ又の月  
志しとわらさかきし調と考へてこ  
しとせしめ

一異本とあるし遠くわら書依りかきと記と

な書多しつたうしあかき中の流し記と  
物の自巻又のし時の情事し記と考へ  
写しつたうしを思ひしとまをそれ依り記と  
むしとつた果しつたうしつたうしつたうし  
を考へし

後人此事と記しと

一掘青色蕉翁の記しつたうしつたうしつたうし  
おのつとつた其時代とわらさかきし  
一示書のありし世ふあま多し人の多し  
を考へしつたうしつたうしつたうしつたうし

くまのこいせふ知らぬのまじかりの是と記す  
一 奇仙眼すまゝくろく箱の白ぬらひ一巻を  
略してせよん

一 附句汁集り出て又いついほくきり其  
依り記す

一 松しりの枯吟奇仙を奥列大畜として  
新しきまゝく改訂川の名形も物晋流と  
云者譲りけし東都よありしとて隠家や  
めくぬねと朝の粟の老しともいふ  
樟りきりけし奇仙の事とて一巻列

しそは川のゆゑ未ち奇なりゆゑも  
傳たると一説きり信常書洞乃  
伝ふも箱の自筆とて殊勝なり物  
相傳はたしぬねがごとく凡調ふ傳り  
年樟りの書くかくのふもきこも多し  
一 我國並に津の奇仙書洞といふ傳とて  
物もくろく箱の真の物とて今予秘記  
系録の書りし眼けしふしを花書とて  
真録ありし書とてなすし一好むは  
五古の中しりし



此巻〜  
可〜  
福〜

浣花井 廿井

芭蕉附合集一

目録

何〜何ともが  
物の名と

者百類

旅人〜家名

晴や雪成元禄七

松の〜れ

花ふ〜き世

時〜秋

こ〜世な部

日〜世と

三〜月〜

松風〜

詩あ〜き〜

風破〜

時〜





芭蕉翁附合集一

百韻四卷

并一

歌仙三十三卷

更寶又年冬

芭蕉庵枕書

あし何をかきぬふい道て河豚汁  
 素堂 信章  
 多き志らんく足れ是より  
 信友 信德  
 片合後穀の玉や乳を練  
 抄名 名字ハ風の藤尔  
 相懸の所用もあつて池の色  
 海老雑臭交りよ折良ハ耐  
 物油の返を湯ゆり月流く  
 又く志らんく小便志あ  
 蘭耳やと何怪き萩の夢  
 德 章 青 德 章 青

那波の芦ハ伊勢オモ市  
 唐交りあふこころ心方ハ  
 者と小判や神よふかぬ  
 物際も理をぬ我なりこ  
 千種一牧是式の意ハ  
 寺堂アアろろめころ能生こ  
 短き心誰て肩はく  
 糠汁のわらふ事と云暮り  
 寄つりく種清乃切徳  
 嘘つきの場合も秋や思ひん  
 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青

ろめ一 体し 忍をこめめ月  
花れ色 朱鞠と 強は夕ら香  
い川 煖身 の 峯の 山吹  
ふしれ 川若し 流る 水茶碗  
涙 宿より 粉 香 解 月  
風 青く 楊枝 百本 割る人  
此 良 梅の ぬる けい 香  
双六の 菩薩と 家し 伊達 安  
流生れ 此 強と ともく ひと 由  
月の前 鴨田 金谷の 六ッ 川  
青 章 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

く 風 河 心 洞 ち 有る  
小 蒲 志 下 大 蛇 の 恨 鱗 糸  
か 祢 の 飯 椀 湯 と ち あり 中  
一 二 秋 涼 の 寂 し く 音 道 々  
自 々 む し の 親 仁 友 達  
蚤 せ 香 ち 倦 る 起 金 しく  
狗 養 用 の 蔭 ち しく 赤  
晴 原 七 半 の 秋 の 淡 風  
わ ごと し たり ち 波 の 岸 ち  
頭 ち 石 魂 忽 ち 花 ち ち  
徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

古い地元の芽 系更切  
増賣の人画の法を以て  
文正の事と意路を以て  
今日よりハ新様と云ふも  
物小かしくもたむけくもや  
有時お花の二階又出さく  
何うと曰ハ、猶目乃 寄  
月影や似せの琥珀小島を  
隠え夜うい、々、後、々  
法の声即ち思むらうて

青 徳 章 者 徳 章 者 徳 章 者 徳 章 青

余波の一と一ゆき  
上下の越乃白山と如く  
百身石乃梅のふかしり  
者俾今れ帝の御時ふ  
ち何極念の欲の撰集  
掛乞も小町、子、急きぬ  
是たも椎木れ横よ森とこれ  
校束瓦能<sup>トホツ</sup>なを堂れ月  
ゆふ入乃をきより、家  
海<sup>い</sup>まや出い、くま、山の秋

章 者 徳 章 者 徳 章 者 徳 章 青

さゆ葉人々こころのたまはれ  
 鏡帯の昔さる禪とさるる  
 三つし雨風の雲り合相なる  
 花葉のるるかろやかよふん  
 葉の朝を執るいふい  
 二柄はらりと見えて立隠さ  
 之れをのふと川さつ  
 万代の古き買ていふなる  
 葉のなるいのでこれ相衣  
 甲子れ浦おきて 願う情愛  
 酒 章 青 酒 章 青 酒 章 青 酒 章 青

三つをなすゆり 史虫乃 酒 章 青  
 茶の海入り 夜 浴ふ 酒 章 青  
 ねるいりりり 石れ 輝る 酒 章 青  
 後とや 仙女の 夜ふら 酒 章 青  
 瓦葺の 欄干 付乃 酒 章 青  
 我急と 嵐の 川 酒 章 青  
 洞とさるる 客さるる 酒 章 青  
 衣帯の 宿の 酒 章 青  
 白いし けたる 酒 章 青  
 鈴の 音 一貫二百 酒 章 青

所 翁 也 ち せ せ せ 香 久 山  
雲 物 乃 ち あり しく あり 事 あり  
幽 冥 しく あり 幽 冥 乃 小 盪  
吾 翁 奇 け 物 乃 上 しく 落 ころ け  
都 台 台 者 舞 万 日 戸 あり  
祖 父 祖 母 け ち あり 言 考 あり  
靴 しく しく あり 事 難 三 あり  
美 信 しく あり 肩 上 あり  
ま 貸 の 夕 戸 風 の 三 節  
章 詠 天 七 皆 一 体 一 早 詠 章

物 ち 也 しく せ せ 香 久 山  
乞 け 世 幽 しく あり 波 の 月  
す 八 清 人 々 芦 け 穂 の 声  
物 の 楮 振 也 しく あり 津 戸  
本 籬 子 け 尾 山 の しく 雲  
人 歎 の 歎 の 下 しく あり  
富 しく あり 美 居 詠 章  
い 翁 翁 翁 しく あり 七 夜 と  
何 しく 詠 白 砂 しく あり 海  
淡 路 厚 海 しく あり 詠 章

神代コノカタの美山河の入りの云  
歌集

延寶六年の春

さうか都上福理小唄の言はむ  
 露とをりし 丘か人歌 信徳  
 春の息美ふ山さうり雪ふんぐ 柳青  
 七巻乃流 吾めいのむかとし 章  
 声、立嵐の波のあそひ舟 徳  
 一よちとらよ阿わう友連 青  
 五間口寂しき月ふら名う内 章  
 春を花散りし 礼金乃秋 徳  
 春しけ者おわらぬはよ是れさう 青

信章

たのひのきいけが志め教おん  
色細賣ある夕暮のりなりよ  
門かしくと和く申おし  
鎌田及進追むきを散上り  
二人の客の事人小性  
赤馬よちえれうをいそぎ  
濱けやつつけ懐張のぬ袋  
石をまみ水れさうまう西度  
浪をき入て大金れ測  
あゝるる地獄の底とらえん  
章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

鉄杖鯉乃骨と碑く  
酒の月後書うらさうん  
津の内まね客れ家  
府と丸神さうともむ宿  
野風も今を世帯物たり  
端乃麻入江の境を寄る  
のい魚いし鴨の啼らん  
山陰よ精進居てねり声  
そくく白杉をくり門  
瀬浪や傍海神のむらうけん  
徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章



寂蓮法師 小僧新巻糸  
 以呂波顔 栴之山しおらりきり  
 雪と坊紳 小時雨階秋  
 新いしり 長月以の字根若  
 世し 玉の夜にし 拾一枚  
 世解<sup>カ</sup> 此 流せと 後日 晴福<sup>カ</sup>  
 迷い子 共 舟 揺り かけ こと  
 湯きと人 しく こと 答し 小  
 怨鬼し ぬく 姿ハ 去 依  
 正之の 中 並れ あり 物 ころり  
 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青

客し 送春 是し こと くれ ころ  
 前池 東 叡 山の 大 や し き  
 世乃 登し 町 中 と 鳴ふ  
 青柳の 髪 出い しく や せ  
 兼 意し しく 胡蝶 ころし 寸  
 連之し 玉 方 汎い の 蛙 啼  
 禿<sup>カ</sup> 童<sup>ム</sup> ち 砂し 雨の 夕 音  
 窓の 土 中 雪 子 隠し け 打 ころ け  
 山 中 山 山 中 亦 玉 指 ころり 中  
 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青

末世の 衆為菩提而此日  
十歳の 和尚のうら守結髪を  
河陀をわくくぬ消やまきい家  
蓮の糸紐金の店の風涼し  
まういこのより 暖 簾の浪  
恋れ剣山し 踊る お人有り  
そなたの 思ひ 恨とこし  
愛中の 下焦し かしこまふ  
家く の ちよ 麻汗かゝふ  
堂あり 大徳 衆れ 喜おりてと  
徳 章 者 徳 章 者 徳 章 者 徳

雑る 僧止 床入る 心  
まうふと 之を 魂 衆とて 衆を 印  
かつす こと や 大徳 衆を  
暮れ 月橋の 情あり 衆を  
まうく 物物 衆皆 衆佛  
見性の 眼たひ けり 湯の 汗  
淋 悔の ぬく けり 因果 則  
衆い や こと あ 衆よ けり の 衆い 衆  
まうまう こと 十 貴 自 名  
大八や 衆い 衆の 止れ けり  
青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青

日雁と百く夕魚乃若  
山くのかま禪フシ下鹿くけ  
青茶乃自白相成若く  
膏茶よ本此実たや海心  
便毒落く又首深き月  
山高く湯年満くまをく  
溪間乃煙物白く花  
白少く花乃雪吹の信濃なる  
院取中く初いく人ま  
然ほし中河すく川連く  
章 青 德 章 青 德 章 青 德 章

山又かや二國の九郎物  
深く如安老よあく若く  
杉風落く法華と解く  
大物の庭れも成系よ六反  
楚れ傳の橋所の秋  
那那の里れ帳の月のく  
よくくおくく會心と求  
千句らり十萬信七鼻の先  
あふく多火のち武菩薩  
音樂の山ら三味線られ心  
德 章 青 德 章 青 德 章 青 德 章

◆四竹 涼く 弁の 都路 青  
 姉 派く 加比 丘尼の 山子 七 章  
 後 家と 減る 佛 まう 山と 徳  
 篠 竹 若 金の 膚 二 面 や ま 青  
 小 糠 三 の きの 草 露 あり 章  
 松 枕 沖 泉 ち や 寝 ぐ 人 徳  
 鶴 七 飯 の ち き り や 山 青  
 大 づ 地 女 ぶ ぐ ぐ け の 為 情 章  
 連 理 の も 一 け 所 湯 と 持 ぐ 徳  
 宮 や ち 白 楽 天 へ 鏡 争 へ 青

角 へ 一 物 り 昭 帝 此 一 廠  
 轡 業

定寶六の春

何れも百韻

物の名も指や吉原の風中

信徳

あふのく空の百餘里の春

柳首

峯此智う祿の草鞋解初く

信章

千人力の東風わさばこ

徳

然きい向て月の高き

青

ふかるとあふ一りの流し

章

吾の髪秋の中糸の福い如

徳

尻花の神鏡うきうき

青

刺せんいふれ風の末と吹

章

丈を山ゆ海士此の声

徳

一念此辯とめて七まとい

青

くくらの鬼の火神いふく

章

浪浮海に伊勢の玉らあけ

徳

神の揚舞と越し海にめり

青

淡濠子夜の若や切きつらん

章

流石別道のちんそく

徳

骨のうづも悲いふふて貞潔

青

まゆりしり踏まそめ

章

夕陽香小風昌之流と水の月  
及海流のこのおまふ所を  
徳章

此亦一句とれも

物一はう一はうとれゆく  
と津一借金なりて切らるる  
劫高ゆりす二月申旬  
秋遊とてしる孫式濠多とん  
八万法智とて古自形なり  
晴波や十方世界法の声  
凡奪への赤とるは流也  
徳章青徳章青徳

い川と、砲礫賣れ老の松  
轉のぬや、又杖とゆく月  
駒とめく、口治とてく音の音  
東坡、小老并の、一むく  
其里、石棚の冬通ひひり  
。 匠子の深又土奠のささとを  
去用急道山と地地の青瓦  
空と流と、暮酢のさく  
岩凡若垂柱剛と投拵ふ  
吹尖と折く暑深乃月  
青徳章青徳章青徳

烟れ衣襟の露をこぼす好を  
 ねりし鈴虫塵ふくとおしく  
 煮くるとつとをこぼす未うれて  
 昔栄平の詩人やおもふ  
 本然色の侍名傳へ居し時  
 貧乏神の社見、まに  
 山雪をせせり成のわりり  
 ね江の浦ろお店のノ噪  
 空桶と穂のまことつとけり  
 平月白こくむくの星朝

章 徳 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

ねりし鈴虫の都の踏りよ  
 父おとれ金はふと春  
 白遠くや十二ハ草れ鳥守り  
 笈の内より春山は月  
 小男座の書とらふ君うす  
 公義の御觸衣をぬき秋  
 湖下との掛衣より軒の露  
 火渡の螢おききゆらん  
 本三位伝子と清さかゆくん  
 貴の言や始おこしから

徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

肩くらむよふ部波の梅の足平  
黄三の筆朝のきこれ春  
そのしの手陶の市解うめて  
酒焼切落ると橋の下も  
釣きのよ中ねらの陰子に放し  
虫のやふらとせけしきまらり  
買ししり志しぬ海客をしけそ  
いつの太きいけいの内一座  
朝比奈のささるる早なるおらるの  
地獄やうらやまき指やふらや  
青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青

小柄ゆきさぬの枝れあふしよそ  
減金の月氣振り候れ道  
平早振本を他うら神姿  
岩うらゆききく勝江のふ世  
銚の文字一ふしきこきん  
控乃らもら六道乃月  
秋や春二代月の地産ひあふ  
澄も〜帯強〜並くはゆ  
むれ枝修羅なる森切形く  
ふ〜兜の巖人參車州  
章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青



春 五原字を引き 萬智由 徳  
 抄るはこけく 巨ひよらつく  
 良幣 下せしくの裁り  
 赤あ垂の旗をすひつす  
 丙桶 引等の一ウルを  
 情思 一人を完くら  
 裏 一尺身破きく 著しはし  
 蚤 一管をく 身の束おく  
 君 一く 仇の先かしたりぬ  
 志 ぬらりの 負の点 死  
 徳 章 者 徳 章 者 徳 章 者

鹿 弱 一 田親王れ 山いし  
 乳 ぬこ 一 おし 思う 孫の 楯  
 疵 疾 神 鬼 決 けし 園の 月  
 ち 一 一 や 西の 浪 ぬき ぬき  
 翁 一 一 一 一 一 一 一 一  
 杉 一 一 一 一 一 一 一 一  
 小 糸 一 一 一 一 一 一 一 一  
 一 一 一 一 一 一 一 一  
 火 雷 一 一 一 一 一 一 一 一  
 若 照 一 一 一 一 一 一 一 一  
 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

江ノ水も夜花已來の時しや  
鷺白鳥とあしらぬ云  
音

貞享二年丙寅正月

日れまよとさしふ不霍のあまこれ  
柳しゝとさしふ日れ相の文  
吾村、柳のさしは柳さしそ  
酒屋の幌に入色乃月  
秋のふりまはらの鳥書らん  
宗庵こぼれく冬のこしらへ  
里くれ考ふのうなふむり  
家系約よ雨おほひをまよ  
朝迷ふと流せむるはも  
くま佛りねん候心つくり  
其角  
文隣  
松風  
二秋  
芳重  
杉凡  
仙化  
李下  
春白  
史伝

あましく連ふれ興とらきん  
歌ふまゝしむれり夢  
有明の梨打鳥帽子をうらむを  
消せり夢と空のふかき  
悦き—若の又懐くあふひく  
後白女あゆみゆく  
山深し乳と香信の声思—  
命と甲斐のあふひく  
法のとふ利整と埋—  
まろし—これととらきん

教是 干り 芭蕉 香 額 角 秋 松 杉 里

さく日—車かきゆり  
ほ—と小雨とありあふ  
強る音あふれし  
静ふし研く蝶ととらきん  
夏あつたつとつと物かけ  
たもあふり眉と涙と衣  
嬰子啼く情—とらきん  
あふり風はあふり切よ入  
かれそり口のそり  
あ—れ月夜の曇り

杉 化 法 白 蕉 松 秋 角 額

石の戸榎新の地は任傳く  
我三代乃刀折能治  
永録ハ金念トく松のう時  
迎江の田榎英濃まを付らん  
疾起くす務よえんをとりまん  
私よ兼此湯乃浦名あり  
筑紫まて人の娘とりし連そ  
孫勅乃堂小部りひそ外  
待宵の鏡ハ墮るる草れ中  
友ふ埃乃物うきこれあり

白下化 里法 角下 松 蕉 化

雨うんを名一割るる郡曇  
門争魚なりと破涼乃寺  
理不々々物々武士ホ六七  
あ〜野々牧乃御臣撰こま  
鵲の一夢夕日と月よ改めく  
此乃能を秋きまふかしり  
輪書乃本れらとむの心をも  
つまねと切〜と世とあを能  
人あまこ年を物とらふたり  
海をり遊入令山の洞

歌 白 里 角 下 白 松 水 法

三  
はまの武臣と名ある画工ありて  
京より汲まらる醒井此多  
玉川やおのくおの所のん  
江湖くよ年ふまらり  
甲の屯れ皆精し誘り  
亦うこるをさ崔  
南むく首屋の細の玉お湖を  
秋し泰とくに屋のつま  
儀能りかしの意をそ折合せ  
鞆ニ買り秋のころう

角 赤 蕉 化 里 水 木 下 籠 松 蕉

麻乃音を物とぬへし中つた  
あしき男の斬り世し月  
管乃雨被七里とぬすらん  
伊納河内の冬れ川つら  
ら車ふつて音あしき  
素ちあらしの院く夜安  
二月の蓮葉へしすさめらや  
席後半のあうま日れ就  
有月あはれ哉乃徳と徹  
おのひあしきと若れ対し

法 下 氷 角 春 赤 里 蕉 風

羞れあつとさう〜とふき鶴鳴  
木魚すれり山陰所〜と  
因トラハレとやくし体むか物乃自  
蘇〜とあしと長、法きあ心  
問〜時あつと先と名と身〜  
心か〜とせと蝉の〜  
三度あし〜の梅吉野山  
あ〜と〜と草名ヲはあき屋  
傾城と忌とあきあふ〜とに  
ゆ〜とあ〜とあ〜の〜と〜

白 下 春 法 化 下 籠 下 籠

弁深き筆好く香か〜と〜  
梅も〜と昔〜と白ひかり〜と〜  
む〜雨と石の灯と〜と消えぬ  
飽〜と春の沖と〜と〜  
伊勢と〜と月と〜と〜と〜  
椿今ナキ〜と〜と橋造り〜とあき  
信長乃法と〜と世や〜と〜と〜  
活き〜と〜と〜と〜と〜と〜  
卯〜と牡丹千里と香と〜と〜  
お〜と〜と〜と〜と〜と〜

白 赤 岐山 化 下 籠 下 春 山 角



敵と成しれ 君、さる 香  
 酒のふ 早乙女連の 並に在く  
 卯月乃 香と 梅うつく 糸  
 縹ハモメつら 神つく けしり 早瀬川  
 蘿ツクシ一面の ころ 檜 枕  
 道志の ぬ 里ふ 花と ころ けり  
 月乃や ちやう 乙泊 水の 氣く  
 菊ツクシ着ラぬ 白ひし 却る けり  
 おも ち 芳 中と 視入 傀儡  
 途ち ころ ぬ 車れ 蒼 葱と なる

蕙 治 化 籠 凡 角 之 蕙 櫻 香

沖こく 舟ふ 史さ けり 誰と  
 花ゆくと 名の けり 波が 砂ふ  
 別り 局と 西と 琴れ けり  
 帆の 奉志と 浮世の 卯と 入  
 萱の ぬ ちや けり 雪と 櫻く けり  
 老乃 舟れ 鏡さ 福と 卯と けり  
 君 流さ けり 流乃 冢と けり  
 明香 八子 湯の ねと けり けり  
 命と けり けり 形と 遠と けり  
 起せ ころ ぬ ころ ぬ 海の なる

香 角 白 蕙 之 化 多 香 白



去々ぬ御とと粒心有明  
藤や石之心坂の目ふくほれ  
小畑さしりしと葉の字印らん  
草才たつるを海傍よかうれ  
光るんぬ身と妹さしりしり  
薰乃志免中面白き夕をみ  
減りさしりし氏乃元王  
以牧野の笛吹かす 幸を  
傾けりしりし 鴨よさしり枝  
見若しと文字は子昂と晴く

角 凡 唯 角 化 白 蕉 凡 唯 角

懐乃ありしき蜀とありしり  
鴻毛の心や考<sup>カウ</sup>指<sup>サ</sup>虫<sup>ム</sup>友<sup>トモ</sup>の交<sup>カウ</sup>か  
後<sup>ノチ</sup>しりしりし海苔とく入<sup>イ</sup>り  
首<sup>ウタ</sup>の目<sup>メ</sup>うしりし花<sup>ハナ</sup>の末<sup>ハタテ</sup>芽<sup>メ</sup>の  
勢<sup>セウ</sup>とくしりしありしりし山<sup>ヤマ</sup>鳥<sup>トリ</sup>

之 白 蕉 角 雷



禁しりむく者ともいふ  
ゆかし清涼し流るる  
春霞鏡持し少くも  
一梅し打ちてお世に  
秋の夜おく家扇乃  
富ふくくはまの神の  
恋し草志のふれ記  
舟と何し河洲の板

良 叔 卜 生 口 蕉 市 枝 格 良

江泥よりし舟と何し  
宿屋のさふれ志し  
園の守れ舟の志し  
舟と何し河洲の板  
大いにおく今よつ  
菴しりむく者ともい  
凡そおの鼓きこえ  
古き舟のふれ記  
舟と何し河洲の板

枝 良 叔 卜 生 口 蕉 市 枝 格 良

去らうよいかい〜  
 ちね〜  
 うら〜  
 うら〜  
 うら〜

枝 良 観 蒼

因風

晴や鳥成す〜  
 煙とさ〜  
 曆よ〜  
 か〜  
 献〜  
 扇の角〜  
 春よ〜  
 馬の鞍〜  
 お〜

梅 類  
 半 砂  
 土 芳  
 良 品  
 風 麦  
 色 蕉  
 木 白  
 家 款  
 配 刀



奇詠めし皆く烏帽子傾く  
洞よりや後、  
七夕より夏と叫ぶ深晴山家  
や青く世はあまの月  
柿のまれ枝とあまの月と  
能てすきや名やおまふ鳥  
依り者の踏進ひつる拳傳ひ  
小斗の星夜包む村雪  
雪れ紅紅餅きく思ふ人  
ねと一本山乃神く

白砂風 蕉 麦 苦 類 必 砂 風

乞食して花ふまらざる流しなま  
雑めく遊そことらふなき  
まふけけらく酔のおうく  
思ひぬ方れ山吹と摘  
けらら火と梅かく獨ぼ  
家ゆれまき寝巻の名を  
川つく菖蒲の踏子まけふ  
月の磨吹く昔入夕暮  
月のおまきく魚の火く  
祐ららく恋のいとらひ

蕉 力 麦 必 芳 風 蕉 力

元禄七年九月四日

椿雅亭具行

松風又新酒とすかみんあきま

月と加こふく石垣れう一

町のつぎう麻のたねえく

きんをたゆこの流とにんち

九月もまきまよけうけり

此山うりく寶座なん街

藤わたり草履の麗切り

床とあこまこころくと刺

と考

椿雅

苞蕉

雪芝

惟然

卓帝

望空

考

夷海橋のたう由と心ふさけて

喧嘩の中と手廻り川の女

仕合し矢橋の舟と雲とさんこ

あふけし解のつらまじり福つ

せりしと流子と流子よつと舞

大工屋根やう御ふさぎとこと

雨のあけいふ事とし教となり

あけぬ日此節白ゆりや

際をたねまきとまきり鳥

歌しつふ字とまきり秋

鐘

芝

蕉

雲

窓

蕉

考

芝

帝

考

有影よ又くく区とせ火念仏  
くもくゆらん此秋のいざく  
嘆むし毎の影と連てしら  
ゆきうけくつとと極けし  
幸し楓のうめの雉子おそ  
内然るもまふ子あそびく  
乃場の門ろくく入あくこよ  
一了れあそび後のまきしたる  
山ふふ密林のまきあそびく  
目をけくくく島れあそび

芭蕉 雀 雛 考 芝 帝 然 雛 芭

母方にいそびく月の物所  
氣ろくこと秋暮る葉れく  
侍軍れ髪を結命く徳の雨  
春あそびけし酒ハまじる  
小舎ろく向い命をの下此年  
火之度の風く人死るあそ  
水くくあそび日古れ粥喰く  
齒くけあそびこの雪埋まる  
漸と今へすこよるかき也 秋  
うきんろく葉あそびくし若

蕉 雀 雛 考 然 芝 雀 帝



淡<sup>イニ</sup>事<sup>ニ</sup>とよ<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>青</sup>は<sup>是</sup>  
 こ<sup>ほ</sup>れ<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>る<sup>朝</sup>の<sup>む</sup>み<sup>子</sup>  
 朝<sup>夕</sup>は<sup>糸</sup>ゆ<sup>い</sup>と<sup>尾</sup>の<sup>業</sup>  
 傾<sup>く</sup>は<sup>半</sup>れ<sup>枝</sup>つ<sup>く</sup>  
 朽<sup>し</sup>せ<sup>と</sup>ゆ<sup>ら</sup>る<sup>楠</sup>の<sup>枝</sup>  
 自<sup>ら</sup>ら<sup>も</sup>送<sup>作</sup>せ<sup>り</sup>  
 如<sup>も</sup>と<sup>も</sup>す<sup>り</sup>秋<sup>の</sup>風  
 濱<sup>の</sup>小<sup>さ</sup>な<sup>音</sup>さ<sup>め</sup>  
 情<sup>け</sup>が<sup>い</sup>と<sup>い</sup>け<sup>い</sup>  
 い<sup>そ</sup>ふ<sup>ろ</sup>無<sup>く</sup>志<sup>し</sup>馬<sup>鹿</sup>

病 帝 然 家 考 市 芝 雅 市 考

雲<sup>イニ</sup>隠<sup>レ</sup>乃<sup>言</sup>し<sup>り</sup>歌<sup>く</sup>む<sup>の</sup>枝  
 根<sup>毎</sup>は<sup>い</sup>ふ<sup>ま</sup>鳥<sup>の</sup>啼<sup>き</sup>

芝 解

家おしるのねとふめつと管を  
かゝる東の海へと智

松の毛管を刃とまゝる 痒くか  
汐干れ流と知りてゆく 蝶  
風中日乃ちくくよういりひと  
自所りぬい鐘く屋くく  
襖の品あしうく此州もみち  
をくくかく一我居く関も  
比しやや陸のゆめく木垣ら  
ちりくくかかの家たらけく  
一物ちくいたの目と東の中

この風くくは流り管と  
いりくくくまのまく神の阿<sup>い</sup>知<sup>り</sup>や  
不<sup>あ</sup>き<sup>く</sup>川<sup>へ</sup> 本<sup>量</sup>流<sup>り</sup>  
連<sup>ま</sup>く<sup>旅</sup>を<sup>は</sup>森<sup>を</sup>く<sup>一</sup>の<sup>勢</sup>  
自<sup>ら</sup>ま<sup>む</sup>む<sup>と</sup>い<sup>く</sup>入<sup>る</sup>面<sup>を</sup>  
期<sup>の</sup>始<sup>き</sup>の<sup>君</sup>の<sup>心</sup>あ<sup>や</sup>ま<sup>り</sup>  
ん<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>く<sup>せ</sup>く<sup>く</sup>管<sup>あ</sup>り  
花<sup>あ</sup>ま<sup>は</sup>く<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>と</sup>管<sup>れ</sup>何<sup>所</sup>  
蝶<sup>舞</sup>く<sup>て</sup>く<sup>な</sup>あ<sup>ん</sup>芝  
湯<sup>の</sup>神<sup>も</sup>く<sup>ゆ</sup>く<sup>離</sup>り<sup>友</sup>

几帳くまへしれ中をそむりたり  
ゆえぬの位よゆへくさう懐か  
多と若母し清くあけり  
憂月とて討ふれ時よ来もまた  
泣く心と道とらと見  
麻元をく何を海急れ月  
記念の神しつじ稲虫  
百物屋の本様をく笑つてき  
栲皮と襦と西へ船  
相傳ひ地の書とよこ酒造て

類一くくさう栲皮のたしり  
おひさふ母伝ふるも若のむ  
屋れあ後いねくさうほる  
まれ物おのれり新く指返り  
吹雪の袖とさうくさう  
杉井乃実加と買んくさう市  
唐巻くさう時め  
お

大いそを紋袖吟のし



節、黄令<sup>レ</sup>請<sup>レ</sup>也 小 紫  
 黒網く強くおしく女、乳  
 枯藤發<sup>レ</sup>榮<sup>レ</sup>の角と老朽<sup>レ</sup>ん  
 魔<sup>レ</sup>神と使<sup>レ</sup>とと急海の暗  
 鉄ら<sup>レ</sup>氷<sup>レ</sup>極<sup>レ</sup>き 女<sup>レ</sup>いよ  
 糸<sup>レ</sup>懐<sup>レ</sup>姫<sup>レ</sup>ありあ、はな  
 山<sup>レ</sup>空く四<sup>レ</sup>睡<sup>レ</sup>の度とう<sup>レ</sup>嵐  
 うつと火<sup>レ</sup>消<sup>レ</sup>く 橋<sup>レ</sup>あり灯  
 下<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>胡<sup>レ</sup>と竹<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>と安  
 西<sup>レ</sup>風とあやよ包<sup>レ</sup>むあやき

角 蕉 角 蕉 角 蕉 角 蕉 角 蕉

衣いふま<sup>レ</sup>堪<sup>レ</sup>撃<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>吹<sup>レ</sup>咽<sup>レ</sup>ん  
 みらのく<sup>レ</sup>夷<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>的  
 武士乃<sup>レ</sup>遣<sup>レ</sup>の丸<sup>レ</sup>寐<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>寸  
 八<sup>レ</sup>声<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>約<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>雪<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>つ、  
 詩あ<sup>レ</sup>えん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>茶<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>價<sup>レ</sup>れ  
 春<sup>レ</sup>湖<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>暮<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>興<sup>レ</sup>吟

蕉、角 蕉 角 蕉

前中畧

とて成

花よつこ世家酒白く食忌し  
 眠とくも湯をせぬ 瘦 一晶  
 雀啼くも湯をせぬ 人 嵐音  
 音子磔とくも湯をせぬ 毒 七角  
 月と湯と江の暮と芦刈と 嵐音  
 浪のさく竹とくも湯をせぬ 物 年  
 碧冠洗く雨と物のはぬはし 晶  
 朝しとくも湯をせぬ 紙衣 蕉  
 浪人の恋とくも湯をせぬ 誓おけし 音

花ぬるし一書よ入るひそるな 葉  
 花うらうら目し宗音と物とひそる 角  
 花冬退之り行鬼と奪つ 具  
 雷鳥はく向杯は音と鳴るん 蕉  
 汐とる海し響子 音  
 傾城の鏡と梅し神代し 具  
 花おりの角とくも湯をせぬ 角  
 化し一の棺とくも湯をせぬ 葉  
 破蕉誤つて待の上と次 音  
 物群し西のと物と遠形り 蕉

つらき志ぬ目の松浦所橋  
免つる見りあげやく此萱鹿  
蚤を私乃盤<sup>サハフキ</sup>杖の世  
柳入しぬ影ハ六十の菊を  
御所了胡望く世と夷に  
人の懐<sup>イ</sup>矣徳長の骨ハ厨子<sup>ツツ</sup>悪ク  
杉田らひなき言此暎  
きつと形や疎中よ似を斬く  
山<sup>ニ</sup>郵よ似く併と負為  
盗<sup>ニ</sup>井の月と伯夷<sup>ハ</sup>足あふ

蕉 菜 角 言 晶 蕉 角 菜 音 具

とくさハ武士ハ 憤<sup>イキトヨリ</sup> 草  
見若あき<sup>ニ</sup>格事とるくや<sup>サ</sup>採<sup>シ</sup>極  
笑ハいさんや<sup>ハ</sup>仰り 鬼  
曉の麻<sup>ニ</sup>云と母よさる<sup>ニ</sup>た<sup>ク</sup>  
つしよ<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>心<sup>ハ</sup>か<sup>ク</sup>し<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>り  
ふよ<sup>ハ</sup>柳<sup>ノ</sup>序<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>の<sup>列</sup>と<sup>を</sup>の<sup>こ</sup>ら<sup>ハ</sup>  
柙<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>瀑<sup>ノ</sup>布<sup>ヲ</sup>酒<sup>ヲ</sup>吞

菜 角 蕉 音 晶 菜 角

仙原のねくくい移る和漢  
月のあしきみこし

破風と日影やよりの夕涼 芭蕉

煮茶ヲ蠅避レ烟ヲ 素堂

合歡醒ス馬上ニ

かさあり小田乃るる落あり 蕉

月代見ニ金氣ヲ

露繁漆玉延ヲ

注加物まあるる碁の中 蕉

幢とや有くわらる村弁

犁ヲ帚ヲ驅ニ偷氣ヲ

田夫ま古く砂ふ御魂屋 蕉

ららるるぬそかぶるる柘の楳

乳とのせりれ何と受らん

舟ハ鑿ラ風早浦

鐘絶ッ日高川

影くしり子苗の流し程とれす

食ハすけぬ故を火め新

説教ニ三社ヲ本

韻使ニ五車一填

、 蕉 、 堂 蕉 、 蕉 、 蕉 、 蕉





町並さそ伊瀬の山越花の香杉風  
 身はうくととふふあじ武蔵野桐青  
 店買のさき新瑞はまのまき  
 とくやうかやうさくさく白波  
 後句強きれ名所の月をし  
 たやこい鐘ハハツ、セツ花  
 麻者交例の瘡ツカヒは又そそく  
 此のの酒とさくはくきん  
 浮世の消くさゆ徳なき相状  
 親仁とて海の山下チロシ風の風  
名、風、

古郷のねらさるる境杭  
 朱砂の深くはゆ降りく  
 採チシむ道のをよみあふ月  
 京へ——海に初ハツれ夢  
 伏んかおほくは秋の風  
 かこひをさふ手枕乃あ  
 一生におうく氣のたふあふ  
 世とていも物モノかうして並  
 ちりゆきふ初の色を山をさ  
 ぬりりともいへる寺さくさふ

おぼろぎと包緒の切  
後としき入編みれ紐  
落しり心のちとちねり  
まにさうふまの白露  
又楊つしきを心法師或者  
いここと蹴る鹿子轡  
森とほけと暮深と月一旅衣  
三里汁ろ流し朝露  
道刹よ押しあつねと野路のあ  
うけく流しとちり風のま

吉長のおよかまはるき時  
あやくららちやと深くしん  
清浄ふらゆの幕の文日就  
火焼のまじり一二寸 福  
何名う福持るる花の徳  
江戸と上野のまの春

貞享四年

時ハ秋ハ一野と一野と一橋のつと

一と一と一風と一風と一月 芭蕉

山陰ハ刈田の白と一と一と一 芭蕉

武者追追一子川の氷 其南

昔ハ一と一と一横と一と一 露為

と一と一と一と一と一と一 治為

傘の画と一と一と一と一と一 芭蕉

祭む一と一と一神と一と一氏 治

暑き日乃汗と一と一と一と一と一 七カ

持一戸のよと一と一と一と一 蕉

幼と一と一と一と一と一と一 角

髪ある一と一と一と一と一と一 另

恋と一と一と一と一と一と一 治

志のり一と一と一と一と一と一 芭蕉

月清く白雨と一と一と一と一と一 芭蕉

おと一と一と一と一と一と一 角

七咳と一と一と一と一と一と一 另

額板と一と一と一と一と一と一 七カ

信濃と一と一と一と一と一と一 治

露沾

磬打しこし 鳥啼り 石 活徳  
 橋より系よる文章と去 流り 蕙  
 才ありし 許と書のころつと 另  
 物陰ハ悲ひやとふ月晴と せり  
 春と可しと夜をあさる 蕙  
 智りと聖後とつる秋のあ 另  
 九輪ゆいさし尾とつりけさ 活  
 風の音ちこふ 蘇鉄のいぢり 蕙  
 大の音とつり 庭の音 掃 蕙  
 舟もなき 鳩の群立よふ寂て 活

死しり 藤と編くともは 活  
 一袖乃 秋見の連衣 膝ふ 蕙  
 名と恥ぬとも 越のころい 活  
 面うけと鏡よ 向ふ男つき 蕙  
 心く 衣のけり 度 柳子のあ せり  
 袷織むの 流乃ともい ちと 蕙  
 柳の水乃ともい ちと 春 蕙

貞享四年十一月廿四日所候處

あつて 斐田河社よきつて

柳青

磨也と鏡も清く 香は花

乃敷庭乃さゆりあつて

時くは松並落る風やこく

家りてせうり山のうらりひ

秋暮く白るこ園のひらり家

つるよひのしりさうまのひのや

肌寒くあつてぬしと襟よりけ

こほりて 髪乃馬交 強 刀

香、系、香、系、香、系

明けりて鐘過ぬるきり

やふけりて必り境あり 唐

古畑よひのしりさうまのひのや

物鳴るや野をのりしり

松明くあつて荷ひり秋の風

多きとゆりてのきり月

物中著れぬるゆりかぶ

酒泉のあえり人をすさめ

此所の女はむらさきおくれ

あつて 流鳥と鳴りけり

香、系、香、系、香、系、香、系

朝露<sup>あさつゆ</sup>こころ<sup>こころ</sup>は<sup>は</sup>備<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>雑<sup>ざつ</sup>の<sup>の</sup>夢<sup>む</sup>  
 水<sup>みづ</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いち</sup>里<sup>り</sup>乃<sup>の</sup>河<sup>か</sup>原<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>け<sup>け</sup>  
 初<sup>はつ</sup>粟<sup>むぎ</sup>と<sup>と</sup>度<sup>た</sup>こ<sup>こ</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>起<sup>お</sup>ち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>  
 新<sup>あらた</sup>衣<sup>い</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>身<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>言<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>れ<sup>れ</sup>  
 能<sup>あた</sup>流<sup>なが</sup>と<sup>と</sup>傾<sup>か</sup>む<sup>む</sup>し<sup>し</sup>身<sup>み</sup>と<sup>と</sup>送<sup>おく</sup>る<sup>る</sup>  
 培<sup>つち</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>岩<sup>いわ</sup>乃<sup>の</sup>隠<sup>かく</sup>れ<sup>れ</sup>死<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>  
 折<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>心<sup>こ</sup>じ<sup>じ</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>心<sup>こ</sup>じ<sup>じ</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>心<sup>こ</sup>じ<sup>じ</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>  
 縣<sup>あかた</sup>乃<sup>の</sup>舞<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>志<sup>し</sup>と<sup>と</sup>同<sup>どう</sup>なる<sup>る</sup>月<sup>つき</sup>  
 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup>

秋<sup>あき</sup>の<sup>の</sup>休<sup>やす</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>昔<sup>むかし</sup>の<sup>の</sup>夢<sup>む</sup>  
 道<sup>みち</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>刈<sup>かり</sup>なる<sup>る</sup> 萱<sup>あしはら</sup>  
 優<sup>やさ</sup>し<sup>し</sup>寒<sup>さむ</sup>の<sup>の</sup>山<sup>やま</sup>廓<sup>くわく</sup>の<sup>の</sup>文<sup>ぶん</sup>讀<sup>よ</sup>む<sup>む</sup>  
 貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>と<sup>と</sup>如<sup>ごと</sup>き<sup>き</sup>は<sup>は</sup>雨<sup>あめ</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>  
 西<sup>にし</sup>の<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>と<sup>と</sup>紫<sup>むらさ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>  
 春<sup>はる</sup>の<sup>の</sup>被<sup>か</sup>と<sup>と</sup>教<sup>おし</sup>る<sup>る</sup>川<sup>がは</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>  
 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup> 青<sup>あお</sup>

初

星寄の言と見よもや啼き鳥 芭蕉  
 船洞より 史虫の煙火 安信  
 葉山のなきに神子梅を極うけん 自笑  
 折ふる楳のまゝに絶はく 知足  
 嘗のるる夜と待月の不のうに 賞言  
 長のあることの非辺青き風 如風  
 一里れやこしなるく 川上小童夜  
 初マツリさこめく 山にさひこも 言  
 市いさそふく 心と柳もな 足  
 牛子襦うきくきさく 信

粗的の言やなうく我の心さ 風  
 月成河にそは螺貝の湯 蕉  
 高細く甲とうきく秋乃風 寒  
 渡り初ま内宇治の楳守 凡  
 菴作の西行言れありれく 足  
 啄及鳥のあうく板の古枝 信  
 さくむく屋食河をますまを 夜  
 やうれ露あむとまきいつけし 足  
 辛ニ螺うく油打り内、高水 凡  
 角あり肩に化粧も多霜 蕉



侍育の女と喰う懐の因  
森くまぬ暮一枕あつうひ  
罪かして死なううい磨ん  
藤子よ誘う一家の一まき  
式日れ日わのこあさそんきく  
海くこ森の物心川口  
櫛子よ願シトカあつう夕も子  
笠物あふ付シトカ螢火乃新  
初月よ外ト雲乃始の川邊  
宿をす移くイ荆神心く

言 凡 信 足 風 夜 蕉 笑 豆 蕉

物寄よつうさの鶴の首をん  
あゝ縁瓦なりかあして  
ひ人乃衣冠をぬきわさうり  
かろ麗しくむれのをとそ身く  
田と区とあつうの首と可く  
衣乃外し鐘とそそふ

辰 笑 言 凡 信 年

京よりいさよかきつるや書れ雲 芭蕉  
 千鳥志くくは海より月 業言  
 小舎を吹く多き風神はらて 知足  
 酒をこさしき風うなる風 如風  
 川移し流るる波を女拂 安信  
 僕をかくしなく牛いそぐこ 自笑  
 やる川三つ及浦の鴉啼はき 重辰  
 明日乃余れ飯よりうら 信  
 わらり丹敷とぬゆい山を 笑  
 鏡つく雨西、いし 蕉

そのとらうし列の後一 足  
 なまこいと流る鄙の揺打 言  
 髪より態乃沖の春了く 意  
 舟は疾出く秋の味若 風  
 釣簾の如くたきとゆい 信  
 楊枝すく入れちくあ 是  
 小神とて草の風を 辰  
 こころぬ猫のりを 言  
 うき年とぬは 是  
 父のつくこと 是

ねしけふとくし料あつ波の夢  
 翅とゆふ鳩をうらうい  
 静かき鶴を物自といふまを  
 三夜何しと初めつりけ  
 山身車よみけら本と荷ひ  
 極<sup>ヒツチ</sup>形しと岩とうらうく  
 流津散くゆふ法の物丸  
 帆くくくさるまをさむら  
 度や少く月もくは影を  
 老きうさうこねとうらう音

笑言信足風矢言意

ふとふりし櫓の煙の志しけら  
 陣乃飯をふ春とゆら<sup>イニヤ</sup>箱  
 山よりまをさる雨の柳<sup>シ</sup>  
 花盛多と集り宗関<sup>ニ</sup>事  
 御地<sup>ク</sup>くら神垣北梅

辰信風足言年

尾張國熱田より舟りて  
所乞乃海之んと船一々

海音く鴨の夢ほのふ白てと

串と鯨とあゆめ 楊 桐系

二百年家いふよ芥こりて 東後

櫻の種より結るあさくら 工山

入月●鵜乃鳥れりりり 系

かふるふ國此家有れゆく 蕉

随雨を老るる母乃海うせ 山

一輪咲く一芍薬此 忘 後

暮の工吏二百安らる目とゆを 蕉

周ノ帰らし 瓶 紫

矣イ芝ほのほ涼遠く言愈る 後

花衣くけく 松乃入 山

笠衣く衣のやま建櫻く花 系

秋のこじん乃人 巻よ 蕉

をこひの野ふれ演ハ月澄く 山

雪れつて小砂と去 後

茶曇る石の扉を押しき 系

英人乃初 涕むしけ 山

塀夷乃舞あまきと蝶と勇と徳と  
 生海龍干はく神ハゆれり  
 本此月より西ノ御堂ハ張白く  
 蕪くくともやの十とくしりて  
 ぼろくし物極作の祖父ハ  
 系ノ名も一福の呪咀  
 不二乃相と笠懸く系系  
 麻ノ川鶴ハひらつてむ  
 徳音ノ鐘と土のひ高糖ハ  
 夜々行く少性萩の戸と押

夜 紫 山 蕪 紫 夜 蕪 山 夜 蕪

月甲ハ外ノ雲ハつたりて  
 棺と急く消くころあ  
 破きころを息とぬくつら  
 高森の縣ノ島傳りて  
 紅深ハ夜更ノ茶の香と煙  
 ちいと霞まはれ水さ日れ也  
 雲雨乃彩霞と標ハひまを  
 青草ちくはるの撮判

夜 紫 山 蕪 紫 夜 蕪 山

貞享五年春

竹の本れむいふこと自い種 をば  
 夢よ朝日と會むうらひ夢 益光  
 表海ふいふの楊子 又玄  
 二紫のすまき 平菴  
 有竹乃草紙ときぬ 晴並  
 森と免い 清里  
 釣掛又嵐のぬき 光  
 門ほそめ 蕉  
 山新ま 菴

わつらふ 玄  
 女のみ 蕉  
 暮 近  
 心 久  
 陣乃 光  
 白 了  
 浅 玄  
 宿 蕉  
 神 光

返りイニチははきりきぬの侍  
 恋くこし池のあめを折る  
 水鶴と雀の記ありつこ  
 たんこむ毎のあしの煙うも  
 むりあつたのよあつらまへ  
 阿こりき楽の一本とせりて  
 釣の王子れ浦いさひ多り  
 おうまきと龍と海。秋の蟬  
 志くき。風は銀管吹ぬふ  
 返りけし其毎の月と見せり

人 延 玄 光 蕉 聖 菴 玄 正 人

出らうしすこし家の島もあま  
 親いしり葉は能らと歌つる  
 十門初祀と名よ代たん  
 此坊を保くまんすもりり  
 ゆりこし持く船繋多り  
 そのゆり法は龍を川横タカあ  
 短冊れこしと神垣乃ま  
 ちろそりりあましりてを  
 そし

人 延 玄 正 蕉 光 菴

貞享五戊辰年七月廿日

お竹急朝長垣興行

西粟根よとわくくあはるる大庵

丸を成

藪のみ中らりて見ゆれま村

長垣

秋の西歩り鴉よある音しけ

若号

月あきと祖をゆく山あひ

一井

沁るるしと人の声ひらりし

越人

葉物うめく屋根葎より

胡及

木れあまの板の末し神也

嵐海

つてゆりあふ鴉乃くひま

蕉

菱舌く蚊の啼きよ感しきん

切

わねと柳くや高きおらり

号

あはれとさるる燈の冷し

井

死くらとたのしみつらかり

人

不心籠とあつれ山あまの月

及

義とくしして森ぬわしと

浮

火ゆりして油のよのこい物者

蕉

白きいぬの刃ゆり葉つき

井

るえよとくしむれうらほひ

号

竹ゆひう折ふ朝の

連

朝



長閑さあはれいふあはれのがけく  
木あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
切菟お外すこき夕暮  
さぬいふあはれいふあはれ  
人一代の恋とさる権  
けい世は葛れ根とけい  
あはれいふあはれいふあはれ  
情いふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ

号及人切蕉人井深及号

早候乃毒とあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ  
あはれいふあはれいふあはれ

号深蕉号人及深蕉



見世をうひひきまき此物り  
家多くて彼物よつむ十寸鏡  
そのおひし指り神子の物ひ  
人多くいまここの府の白ひら  
初遊子範々をれ所 隅  
おやまふは麻のあふ露中よ  
垣穂乃さけけ露のこふきと  
あやみにけふ妹々文子々  
何の雪いたるまうこつむら  
ひ月のうらのをえく清うま

蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人

旅とをましく 鞍よいねり  
秋の田と刈とをの筆のせり  
さしけちまう文字向よ  
いりき瓦底の本茶屋  
此をとり子被くこひま  
花の比後刻ふしうらやま  
田みけんくく <sup>ナニクサキ</sup> 将きくら

蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人

冬来や人をかゝぬ市は梅濁子  
 年々貧たはる有は神にて  
 火と焚舟は星くもさそ  
 鷲うしく松がりりさ霞の月  
 桶カサシししんす死一し  
 太刀抱る童の如きてお時ぬ  
 車のとほなほほし泣し  
 身事由友に地花アサシ茶くらと  
 妹しと乳まいらまひららん  
 其角 芭蕉 仙化 松風 口歌 子化 凡角

く〜鏡花よ添くはう〜を  
 河合の合的白雲らまら〜  
 加茂川の流と胸の火はほこ  
 そちら〜市布原のほこ  
 鵲の啼くふ枝つ〜生ま〜れ  
 牛と彩かな月を海きぬ  
 花乃日と志はる老とがつれ  
 桃し〜梅う〜玉の研  
 朝倉賢者をかゝる船を〜  
 河の海と繪し〜海を〜  
 化角 并角 文麟 子下 凡角 凡角

ねし 鬼や ちり 舟の 庵は 酒との  
 心を 媚す いくと せれ さん  
 四ツの 時冬 ありし のさし  
 ち 仙し け 細き 三は ね  
 河里 ねた 屋の もと ころ 角入  
 伴 舞 ありし 三 茶 鞋 若 公 三  
 賢 徳 なる や 増ふ のれ 約 よ 公  
 ね ち まし 破 ち 切 新 ね ち  
 月 入 ち 給 書 ね ち 蒲 寸 ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

塚の 下 ぬき かん 秋 ち 風  
 邦 ち 軍 下 ち ち 色 け ち  
 大 ね の ね ち ち ち ち ち ち  
 す ち ね ち ち ち ち ち ち

大いしむき山かき日一掃業心  
 此あたへく香の名しこころ  
 鵲の飛る里の垣根は鱗とこころ  
 束のちりく乃神さなる  
 あらゆるの春すい人のあはれ  
 子をせし 形の入し心あり  
 恒在するあころるはあむら  
 芥子かりしありく竹波一村  
 被衣る魚色白く表く  
 あれ巻判よあるころは

若格  
 芭蕉  
 為山  
 越人  
 蓋笠  
 舟泉  
 聖水  
 松  
 庭  
 兮

精かしく金子持心恥しく  
 おもふとれくは影成りま  
 雨ふりの烟夢はあはれかり  
 忍もなくて死る秋の世  
 糸この建路かき山目下  
 まこ月のこめぬ眉のころり  
 母心く鐘つと堂のむらさ  
 道心ゆへ蟻の音く成り  
 春く心うころるの世閑と  
 碎とちまこめ此指のうへ

人  
 在  
 泉  
 多  
 松  
 人  
 多  
 泉  
 道  
 庭  
 兮

夕ぐれい<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>頃<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>可<sup>ツタ</sup>ぬ<sup>ツタ</sup>蓬<sup>ツタ</sup>池<sup>ツタ</sup>了  
 し<sup>ツタ</sup>も<sup>ツタ</sup>よ<sup>ツタ</sup>り<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>ふ<sup>ツタ</sup>こ<sup>ツタ</sup>ま<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>思<sup>ツタ</sup>ふ<sup>ツタ</sup>  
 追<sup>ツタ</sup>つ<sup>ツタ</sup>る<sup>ツタ</sup>木<sup>ツタ</sup>橋<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>馬<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>か<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>つ<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>  
 半<sup>ツタ</sup>ま<sup>ツタ</sup>さ<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>部<sup>ツタ</sup>な<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>片<sup>ツタ</sup>  
 巾<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>き<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>絵<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>さ<sup>ツタ</sup>う<sup>ツタ</sup>て<sup>ツタ</sup>蘇<sup>ツタ</sup>合<sup>ツタ</sup>り<sup>ツタ</sup>  
 女<sup>ツタ</sup>御<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>月<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>ち<sup>ツタ</sup>さ<sup>ツタ</sup>ふ<sup>ツタ</sup>う<sup>ツタ</sup>  
 吾<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>目<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>ま<sup>ツタ</sup>あ<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>洞<sup>ツタ</sup>あ<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>ふ<sup>ツタ</sup>  
 深<sup>ツタ</sup>鏡<sup>ツタ</sup>照<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>耳<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>ほ<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>く<sup>ツタ</sup>  
 所<sup>ツタ</sup>糸<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>川<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>赤<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>に<sup>ツタ</sup>云<sup>ツタ</sup>有<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>  
 流<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>牛<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>い<sup>ツタ</sup>於<sup>ツタ</sup>に<sup>ツタ</sup>初<sup>ツタ</sup>ゆ<sup>ツタ</sup>く<sup>ツタ</sup>  
 水 糸 池 水 弓 人 於 意 之 弓

よあ本畧

たむ成

将<sup>ツタ</sup>こ<sup>ツタ</sup>か<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>力<sup>ツタ</sup>部<sup>ツタ</sup>糸<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>似<sup>ツタ</sup>る<sup>ツタ</sup>哉<sup>ツタ</sup>  
 空<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>り<sup>ツタ</sup>や<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>り<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>る<sup>ツタ</sup>笠<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>山<sup>ツタ</sup>糸<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>  
 有<sup>ツタ</sup>め<sup>ツタ</sup>る<sup>ツタ</sup>糸<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>酒<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>つ<sup>ツタ</sup>く<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>き<sup>ツタ</sup>く<sup>ツタ</sup>  
 か<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>病<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>あ<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>糸<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>  
 物<sup>ツタ</sup>糸<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>ほ<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>り<sup>ツタ</sup>す<sup>ツタ</sup>き<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>白<sup>ツタ</sup>ひ<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>  
 日<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>り<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>よ<sup>ツタ</sup>野<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>糸<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>州<sup>ツタ</sup>  
 糸<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>菴<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>踏<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>か<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>あ<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>に<sup>ツタ</sup>  
 燈<sup>ツタ</sup>を<sup>ツタ</sup>や<sup>ツタ</sup>す<sup>ツタ</sup>き<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>志<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>糸<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>の<sup>ツタ</sup>籠<sup>ツタ</sup>  
 こ<sup>ツタ</sup>つ<sup>ツタ</sup>ら<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>れ<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>し<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>乳<sup>ツタ</sup>と<sup>ツタ</sup>志<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>乃<sup>ツタ</sup>於<sup>ツタ</sup>  
 糸 菴 乃 踏 乃 志 乃 籠  
 正 杜 重 為 野  
 平 国 五 乃 水

きこしめうとふまじくはなれ  
影法師の曉さしく火を續く  
あまのついでにきこしめうとふまじく  
田舎のついでにきこしめうとふまじく  
霧よるのついでにきこしめうとふまじく  
たうたうのついでにきこしめうとふまじく  
清さしめうとふまじく  
二の尻は逆風よむのついでにきこしめうとふまじく  
襟をしらぬよとふまじく  
素物よるついでにきこしめうとふまじく

又 意 多 丑 國 水 弓 必 意 弓

いさうの恨の夫とてからん  
盗人乃に念ふねのついでにきこしめうとふまじく  
志すついでにきこしめうとふまじく  
言腹をきこしめうとふまじく  
みよついでにきこしめうとふまじく  
志すついでにきこしめうとふまじく  
馬賊のついでにきこしめうとふまじく  
あまのついでにきこしめうとふまじく  
秋のついでにきこしめうとふまじく  
日中のついでにきこしめうとふまじく

又 意 水 又 必 弓 弓 國 意 弓



巾よ木槿をえさせ琵琶歩  
 牛乃初るるぬ草は夕まき  
 若し<sup>ツナシ</sup>鶯の真をいふ<sup>タ</sup>  
 口いつるあまの星乃<sup>ム</sup>  
 ちまふ<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 結い<sup>コト</sup>に<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 廊下を<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>

五 五 五 五 五 五

若月や鶴の<sup>カク</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 冬に<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 松橋<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 音を<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 酌<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 秋の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 洲<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>  
 茶<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>

花 五 五 五 五 五



元政の草花を破ぬく  
 侍人馬場の手をぬく  
 いらふも男猫いづれを控えて  
 言はれしすの曹さきとふ  
 水干と秀句は聖のやま  
 山原花匂ふさきのこころ

蕉 子 水 水 皇

炭賣れしうきうきとあはれ  
 いよの振を鏡磨寒  
 花蘇馬骨の骨よさう  
 鶴見ふゆきの月うすなり  
 紅のつね秋の目瓶酒さき目  
 萩柳うさ成市は振まふ  
 か夜川や胡麻子代糸や  
 ねんころり舞かろし  
 ねんころり舞かろし  
 うきをたさこち成歌ふ

行 杜 野 芭 羽 写 水 水 皇

重五



いのきくは誰と云ふ人の像  
 沈よ人のなきよき芥の根  
 粥すら境なきかこまきり  
 物事の早し遅くまらと  
 小れこまきく藤かたて  
 祈れぬ夢とまらむしむ  
 必言蕉多さ

お牛畧

けらるる白く暮す暮れ 杜園  
 こまきくゆきゆきのいなつ  
 齒屑のきと初物へのなき有る  
 水の出門とたあ字のたる  
 馬糞掻あふきに風のあうす  
 茶れ湯若とせせ地の薄ふ 英  
 らくきくは物む始くつま  
 燈籠もつゆさくしつる  
 雲霧のすゆきと探れぬ

重五 野水 芭蕉 存心 正平 又 必 意



梅如うんくまは望うてと者  
 意のゆくとゆくとをなぬ教り  
 おうまき念佛教と海さつ  
 うけつすき初穂さよと起徒と  
 おのひのひにもおの帯の川  
 志のたななる花のうけはよ入  
 うた空の目成おしたけりく  
 蕪 弓 五 有 弓 必 有

お中畧

大川雪たこ〜と袴悉て歸ら  
 おりもまことんぬ葉う食  
 野菜ま〜を川あり蝶の羽折と  
 うつ〜も字れとらるぬい〜りり  
 麻呂、月神ふ鞠教と卯す〜ん  
 枇杷をそ〜り 貞徳の 富  
 西、存り沙音の田畑あり〜と  
 奥乃き〜ら〜と父只存とこま〜く  
 庭布字と〜は〜は〜と〜り男  
 野水  
 杜園  
 芭蕉  
 新号  
 重五  
 正平  
 國  
 有  
 弓

縁なきけの恨のこころ  
いとこし痛とちきう比うなま  
明ゆるういふいふい送るをん  
小三ちふあさいせひつういさ  
月をよまき牡丹ゆと人  
鏡あまのかさいあまき忍ぶと  
小川くさぬ比花切町  
初それの世もや家のい免しく  
くはゆいこのまそついでさ  
松箱に條とゆり福やふのむら

与有國与又國蕉五有並

うくいと記よ物とわく  
篠ふく梢の柿の葉さ  
と細く不破の冨人  
道すくつ出流とあまの春と意  
福さ免くのさそと七十  
奉加めぬの堂は金うらめな  
いしらのの傘下奉り  
薄比は鷺の子遊ふ夕らるる  
まよまよつと薄花とさ  
月ふをく内唐輪の掣は赤柿

与有國与五必蕉五有並



急ぎぬきぬき臨海に  
 秋蝶の虚はなまきし  
 後れ實つてふ来不  
 能しり現をいしき山  
 都らり典侍の病、巴  
 三ヶ花鶴鶴虎毛の香  
 しとていさむ故う物  
 蕉 必 又 弓

夕と板のむれ神しち  
 いしと糸と指教のい  
 日影心維子の離とた  
 清水とすくふる柄奴  
 杯らき姓巴は都賣  
 者のらやあふ梅子と  
 ちか紙は都のまら  
 蒼る大津は三井の  
 吾とす入溪の蛇、神  
 麻より鴨の口わ百  
 芭蕉 叩獨 黄口 東蘇 二山 蕉 娼 山 紫

杉風の宴は酒と飲つて  
 佛と割む西首は僧  
 馬眼玉の髪は女髪より  
 恋とんぬる物魚の月  
 状は行く味も嘗ひたり  
 白子のたまやわきりて海  
 波よする鯨の骨はましく  
 陰干す旅船のかつて遠く  
 笠物と雲より暮る瘦男  
 女首の塔より夕くれ

口蘇山柴蕉燭蘇  
 口蘇山柴蕉燭蘇  
 口蘇山柴蕉燭蘇

鶺鴒<sup>ニハタキキ</sup>は瓦と松の園はわらまて  
 風了<sup>キレイ</sup>も越なく久の井死  
 舟よりて朴の皮を河挽<sup>カハミ</sup>め  
 田舎祭りも物見やらあは  
 井うてあはれの手をたる  
 大いれく君や酒買は切  
 浪の沖に船<sup>シラウチヨヨ</sup>遊かせ  
 靴<sup>カッ</sup>韮<sup>カッ</sup>乃東の寺は月凄く  
 橋も小栗の何をまひくと

燭蘇山柴蕉燭蘇  
 口蘇山柴蕉燭蘇  
 口蘇山柴蕉燭蘇

蟬啼くまゝに濕杖の杖の電  
 草をうらむる心のはれ琴  
 ありけるは雲を梳てゆり世ふ  
 入日れ初る星をうつりに  
 あまの沖をうらむるのちく  
 けいけいの象まゝに西行  
 楫 蕉 紫 山 蕉

だつていかによめる 蕉  
 凍石る土いひらりぬちり 昌碧  
 ね風は福い日向のまゝかきて 飛桐  
 鶴白鳥のわらへんまゝに 為子  
 水消く舟をよむの秋のくれ 水  
 言う山の鶴は月をいひまゝに 狂者  
 きぬくや馬留子重なる世に 越人  
 眉ほそしむる心うらむる女 舟泉  
 雲も赤らむる心まゝにまゝに 年  
 けいけいの象まゝに西行 相



は橋をぬく物も音れ中  
山ひさしして音初る河  
志えしとく了殺活ふらたし  
相音泉

いにしとむ成る花の陰  
穀の中も槽やまふき  
年水

さし山の庭ゆけえ路みそれ  
ちくくいる板の埋火  
草

玄米

鯨川沖は一浪もあけけく  
苗うえ初る砂るの去  
菰

菰

はるけの入口は月もあま  
おろよおもい驢のかうい  
草

草

あやのうらやすまぬ初る  
産産うつするるれ子草  
草

草

里通る新も梅田の丘堤  
かゆ血くらし世の終り人

草

はふ是は草鞋をくは二階堂  
菰の灯のきる船越の小屋  
唱花や福くると余重の月と鶴  
まきまの裏をたやす精ホウ嘆  
踊場よいつそ七更の半歩  
情志くはの神を引さく  
舟子れ紫末のゆきを道  
ふまの指ろりゆふ宣去  
と川の武威とふらる風初  
泣くも成する史のふ成き

源 藤 末 草 藤 踊 草 末 源 藤

決つ初は五百計の草乃踊  
そ良白く宵う糸かうふ向  
町端の埃掃たて火と燃寸  
死を忘れ若る祖父の岩を  
月絢の謂はると起まの境  
肉表の世は入しまれ子  
萩垣の川と境は原乃末  
暮し物いふ秋を暮まき  
傘のあやうはもき月れ雲  
柳灯さうく切のね云

源 藤 末 草 藤 踊 草 末 源 藤

始元の底よりすつる店のは  
 肥くす味よき承れ梅安  
 比ら子れかよ過する摩羅子  
 唯もゆめぬ医者のお物  
 不味く朝端あつたき氣強  
 他国より風中よなくむ  
 源 蕉 来 系 蕉 源

梅より葉よりこし者の葉茶汁  
 かこあしつるをれり暎  
 雲雀すく小田よ物比かれや  
 志しこ程ふくむれり  
 所隅よ虫歯かえく苦れ月  
 二階乃客をくしれあり  
 放やうつしれ初らんてきと  
 始のよ正の力強きいり  
 不中んれ初ふこゆり新麻山  
 肉新以しし味あうり  
 乙列 玕碩 素男 列 蕉 男 碩 蕉 列

卯の別乃美もよ華ふ小西中  
らみさうれおる志の如く  
蘇の札すきれはともあへ  
着こしは百舌乃一夢  
信まよとあこし秋の月  
汐さしもあふの海つ  
鏡の柄さすしらる花のれ  
一はまもあふかか  
まは目よはあてくる経机  
店を物くら佐のもか

碩 胃 州 智月 凡北 北 正秀 東

河あつい鳩のきりれ結の糸  
わらひせしは鷓下  
大橋よまのく風あふ  
力いぬはあふる百折かき  
小力の塔又たは細工さこ  
柳さかす大さの葉  
うのたねはは伊七流さ  
しのお金をあつらひ  
いそしうれあをらる破扇  
留は袖さきくはあ

半蔵 土芳 茂 芳 殊 園 椗 雛 凡 籠



噴霧の隣りちき縁つる  
 海つらうをこくせんを  
 形なき画とあひうる舎は  
 うすきう心竹の刺り  
 花よまきくあまき定し  
 離る旅と深ふるあま

芳 風 嵐 史 邦 野 水 羽 紅

元禄二年

市中の物のあはれ  
 あつしと門くれ  
 二番州の果と物  
 灰お多くくろ免  
 けもの浪とんふ  
 だといやしよ  
 草村の煙こ  
 落の芽より  
 是かのたうら

元 北 芭 蕉 玄 栗 北 魚 北 来 益 北 来 益

能定の七尾の冬を信りき  
 奥の骨出りうき老をうき  
 侍人入し小所門のカキ礎  
 立ちし屏風と倒れ女子を  
 海名の舟に笑子候し  
 苗香の實と吹流をゆく嵐  
 傍やいさむく寺よりつら  
 橋川の橋と世とゆる結の月  
 年よ一汁の地子えうき  
 五十年生まつけぬぬミツタケ潜

北 来 庭 兆 来 庭 兆 来 庭 兆

足袋のやいふいふ道  
 追々一甲の心は刀打  
 て何ちのそけいあるにほ  
 戸障子しりかひの喜を金巻  
 てんきしすまのらいつら色つく  
 こうくと単靴を脱ぎ目薬し  
 参りしつひは部しを川秋  
 そめたにうらひなる神宮  
 ゆうとく巻のあそぬ中櫃  
 草菴に替く花をいすやう

庭 兆 来 庭 兆 来 庭 兆 来 庭 兆

命婦しき 撰集りて  
 之由しき 爲りて 悲し  
 浮世は果を 皆小町あり  
 何ゆへに 悲すも かなし  
 月あかり 影さし 板敷  
 白く 風流の 心け  
 かたき 心ゆく 庭に 移りて

来 意 此 来 意 此 来

原汁桶の 葉や ころも 切りて  
 あかしく せんそ 青森より 杖  
 新を 愛する たり 月 新に  
 形 一と 娘 十乃 ころも  
 子代 纏つて 物と 板子 目  
 當れ 高き あり 音 降  
 雲の 心 物に けり 雲の 物  
 摩耶 なる 根よ 雲の けり  
 中 心 なる 心 けり 風が けり  
 蛇乃 口 雲と けり 氣味 けり

元 此  
 芭 蕉  
 野 水  
 玄 来  
 芭 蕉  
 来 此  
 来 此  
 来 此

そのおのひらふに志を体じ日ふ  
運せりて交るにりれふと  
金銀とくまよりの為のやとと  
あつた月をさこの背の月  
町内り林にあり明やと  
何れをさるにとあらしり  
まよりの西念の衣をさ  
まよりの山も傳ふ四つ  
紫さる水の株とくく

まよ 北 慈 多 来 北 慈 目 多

冬衣の志にあつた山に凡  
旅り流をにありて  
まよりの女の智恵とく  
何れしとま 根乃ちり  
夕日東雲の雲をのに廟も  
くまよりのあつた水  
うまよりの月懐をさる  
又いちりれ部と死出す  
堤より水の青をさる  
かまよりの社を能く

慈 北 来 多 北 慈 水 来 慈 北

物賣の鹿おるる名宗子と  
 雨乃やしらた世常迅速  
 屋ねる青巻のあれたとよ  
 ちしらつこあは蒲のそらさん  
 糸極後一とよさきり  
 春ら三月曙乃とら

東 北 北 東  
 東 北 東 北

七音の暇と創ぬとけりこれ  
 一婦と風の木の葉志田心  
 股の物とゆき川とえて  
 大ゆきとす藤浪のら  
 中しな名道る青れ月  
 人あしとれと名物乃梨  
 かまふら書海おる秋巻と  
 ちまこしらひらやと巻袋  
 何とあまの田志田のり  
 里とえ初と午れ貝ふく

道 東 北 邦 東 史 邦 凡 北 道 東

ほとけのつらき年々おぼろのまはる  
 芙蓉のむのちりくもちりく  
 吸物の先がまゝいすせん  
 三里あきらののびえけ  
 いまも盧同の男居ありて  
 河まつさくは月の終夜  
 昔よりおぼろのまはる  
 ひらり車一今物乃腹より  
 いちとびよ二日の物も喰く  
 音しけりしとて鳴のふりせ

北 邦 益 邦 北 邦 益 邦 北 邦

火のつらき年々おぼろのまはる  
 ほとけのつらき年々おぼろのまはる  
 瘦骨のちりくもちりく  
 海をかきく車一今物乃腹より  
 いまも盧同の男居ありて  
 河まつさくは月の終夜  
 昔よりおぼろのまはる  
 ひらり車一今物乃腹より  
 いちとびよ二日の物も喰く  
 音しけりしとて鳴のふりせ

北 邦 益 邦 北 邦 益 邦 北 邦

邦のこや蒼波導かゝりて後  
 布子もあやしく風の夕らま  
 押合へ森とて又さいつらま  
 多められぬ雲のまじり赤さ  
 一揮歎にくるまじりれたれ  
 枇杷の古葉もあやまりえら  
 邦 兆 来 蕉 兆 邦

貞享四年外書

時鳥宮成西つらり  
 うらみ晴らさるれのかれ  
 萱着れぬふ花を掃きき  
 人のたらしやしぬ教り  
 西ゆよ土玉のかん虫一玉  
 植木のうけふ今よりある故  
 物すまん律よあふて静さよ  
 昼もくしんいつも零チ風  
 篠床の虎も指さるれ音つき  
 けり〜〜〜中〜〜〜おらるれさえ  
 叩 堀  
 閑 水  
 芭 蕉  
 相 葉  
 東 菰  
 工 山  
 桂 楫  
 枇 筆  
 行

觸事と四念をたしめりやう所  
埃とのけりうけつる心一つ  
悉くはを其中おとせりんま  
かくましく文の神より重たき  
隙明の用い席ふたりしきん  
一里まてくから壽神の表  
おぬむとゆきく月と山際ふ  
定しく東風のきんまうぬも  
あこがれをた早くし替る雨  
清美はうらぬぬのせらりく

觸事 觸事 觸事 觸事 觸事 觸事 觸事 觸事

披いてい何か揺れ汗ぬい  
非人七都をくくちりちるを  
取らぬ心と心相感のひつぬ  
みすたととて一寸の音  
を海のなう海は茶はぬい  
やうういひら鐘とるえん  
まこしてはと物を月ぬ  
やううううううううう  
去還ふ石のえうううの中  
手前の杖といふうううう

水場 水場 水場 水場 水場 水場 水場 水場



お十一は海にまはるる  
 不浄とてけり 金床の徳  
 新道とてまはるる ありは成  
 活れしひきか 僧者の小宅  
 六徑のこれとて 古形を秘蔵  
 邪なりとて ありは日なり

紫 存 反 山 行 揖

おの秋

色くは葉とひらの白ひれ  
 ねのひきと 草庵に秋  
 まんじゆとて 月とてひらえ  
 みられとて 人のとりえ  
 おもひか 花とて 立ちり  
 あけけ けり 花とて やら  
 ひあて けり 花とて 信持  
 きり けり 花とて 竹殿村  
 かき けり 花とて けり

相系 芭蕉 東夜 工山 閑水 擬年 端 紫

印 獨

この登りしこゝのあはれは  
精がしてまゝにひたひたに  
さながらとせしむる新成也  
あつちの相あつちのあつち  
硯をうけし月よとて  
空にひらけし雲よとて  
まゝの目のまゝの眉のまゝ  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち

山水 楊 若 菴 水 山 若 菴

研とまゝにひたひたの上  
夕ぐれに霞にまじりて  
ひたひたのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち

楊 若 菴 水 山 若 菴

島<sup>ヤスム</sup>の半一と行はけりゆく  
松くまの事と控れちの言  
ひ灯の火れおき明こ  
くまの加おきこ果の風たし  
年一女又それの一時  
陸の心桃源洞のかりな  
茶の酒よ先水たあらし

山 紫 燭 夜 海 山 紫

